

5月2日(火)2023年  
新潟日報

# Otona

おとなプラス

2023年5月2日(火)新潟日報情報紙  
「おとなプラス」1,2,3面  
新潟日报社 転載許可済



「水球のまち」を掲げる柏崎市。地元の新潟産業大学(軽井川)の水球部は、その一翼を担っている。近年はインカレ(日本学生選手権)で男子が上位に顔を出すようになった。競技だけではなく、市内で開催される大会にスタッフとして参加。水球を生かした地域活性化に貢献している。

水球は各チーム7人の選手が、足が着かない深さのプールでボールを奪い合い、得点を争うスポーツだ。柏崎の水球の歴史は、1964年の新潟国体にさかのぼる。水球の会場に選ばれ、関係者はそこから歴史をつないできた。

産業大水球部は、短大から4年制の



## 新潟産業大水球部

### 熱く激しく 柏崎とともに

大学となった88年に創部した。2021年の東京五輪には、当時3年で男子の稲場悠介選手、卒業生で女子の小出未来選手を送り込んだ。

強化が進んだきっかけは09年の新潟国体だ。柏崎市が水球の会場となり、元日本代表で世界的な選手の青柳勸さん(12)が柏崎を拠点に活動を始めた。青柳さんは10年に水球クラブ「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎」(ブルボンKZ)を立ち上げ、産業大水球部20人、女子9人。

大学の指揮も執ることになった。産業大は15年からブルボンKZのU-22(22歳以下)のカテゴリーに位置付けられている。

産業大にはプールがない。恵まれた練習環境ではないが、男子は15年のインカレで準優勝し、16年も3位に。17年に佐々木洋輔監督(34)が就任した後も強化を続け、21年のインカレで再び3位に食い込んだ。現在の部員は男子20人、女子9人。



練習に励む新潟産業大水球部=柏崎市の県立柏崎アクアパーク (長岡支社・中里一也撮影)

4月、練習拠点の県立柏崎アクアパーク(柏崎市)を訪ねると、プールでは試合形式の練習をしていた。「水中の格闘技」とも呼ばれる水球。水しぶきが上がる激しい攻防に思わず見入った。

「柏崎を選んでくれた選手たち。全員がうまくなり、人間的に成長できるように指導している」と佐々木監督。人口約7万8千人の地方都市に根を張る水球部を取材した。

(柏崎総局・野瀬和紀)

|| 2面に続く ||



新潟産業大水球部の男子部員(右)と女子部員



新潟産業大の水球部には男子20人、女子9人が所属し、目標に向かって努力を重ねている。柏崎市出身の女子選手と男子の攻撃の要、留学生に意気込みを聞いた。

## 柏崎出身・前野美月選手、栗林陽華選手

### 「地域を盛り上げたい」

県外出身の部員も多い新潟産業大水球部。そんな中、地元・柏崎市出身の女子部員、3年の前野美月選手(20)と2年の栗林陽華選手(20)は「地元の選手として、地域に貢献したい」と口をそろえる。

2人の日常生活の中には、水球が身近にあった。

前野選手は小学3、4年生の頃、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎に所属していた姉の練習を見て水球を始めた。「面白そうだった」と振り返る。

産業大では主に守備的なポジションでプレー。筋力アップなどの努力を重ね、試合に出場している。

水球の出前授業や体験教室にスタッフとして関わることもある。「プレーする人が1人でも増えたらうれしい」と話す。

栗林選手は、ブルボンKZの指導者を父に持ち、幼少の頃からプールに遊びに来ていた。競泳に取り組んでいたが、中学1年で水球を始めた。

攻撃的なポジションを担う。相手のプレッシャーを受けても、位置取りで負けない技術力や筋力の向上に取り組んでいる。

昨年は初戦敗退だったインカレでの1勝を目標に掲げ、「いい成績を残して、地域を盛り上げたい」と語った。

## 攻撃の要・横山颯太郎選手 「日本代表と練習、魅力」

男子の得点源である3年の横山颯太郎選手(20)＝宮崎県出身＝は「日本代表と練習できる環境が魅力的だった」と産業大への進学を決めた。

産業大では、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎に所属する日本代表や社会人のトップレベルの選手と合同で練習するケースも多い。

宮崎工業高校時代、全国大会で上位に進めなかった横山選手は、こうした環境で刺激を受け、

部員同士で切磋琢磨して実力を伸ばした。「入学当初は全く通用しなかった。悔しくて、必死に食らいついた」と努力の日々を振り返る。

身長は約180センチで、体重は90キロを超える。相手ゴール前で攻撃の起点となるポジションを担う。「今年はインカレなどでたくさん得点を挙げたい」と自覚十分に語る。

4月には20歳以下の日本代表の選考合宿に参加。貴重な経験を糧にさらなる成長を誓った。



シュートを放つ横山颯太郎選手

## 留学生・パク・ソンフン選手 「成長期し韓国代表へ」

産業大水球部には、男女計4人の留学生がいる。そのうちの1人、2年の男子部員、パク・ソンフン選手(20)＝韓国出身＝は「産大で成長し、韓国代表になりたい」と練習に励んでいる。

水球は新潟産業大学付属高校(柏崎市)で始めた。競泳に取り組んでいたが、水球の韓国代表監督である父の影響もあり転

向。父とブルボンウォーターポロクラブ柏崎元総監督の青柳勸さんが知り合いだった縁で、産大付属高校に進学した。

身長186センチ、体重100キロ。日本は韓国よりも競技力が高いといい、「とにかく技術を身につけたい」と語る。ことしの目標は「インカレにスタメンで出場すること」。流ちょうな日本語で話した。



柏崎市出身の前野美月選手(左)と栗林陽華選手



練習メニューを確認するパク・ソンフン選手(中央)

# 大会の運営サポート

県立柏崎アクアパーク(柏崎市)で3月に開かれた水球の全日本ジュニア選手権大会「かしわざき潮風カップ」の会場に、新潟産業大水球部の部員の姿があった。スタッフとして試合用ロープの張り替えや受付係などを担当し、スムーズな運営をサポートした。

水球は男子と女子でコートの広さが異なる。試合日程によってはロープを張り替える必要がある、この日は産業大の男子部員がプールに入って手際よく作業した。会場の入り口では、受付係の女子部員が来場者を丁寧に迎えていた。

潮風カップは17歳以下による全国大会で、産業大の部員は2015年の第1回大会から運営に携わる。大会の誘

致に関わった柏崎市水球のまち推進室の関矢隆志さん(60)は「産業大の部員



がないければ大会は続けられない」と語る。

柏崎市は「水球のまち」を掲げており、大会や合宿を誘致し、関係人口の増加などによる地域活性化を目指して



いる。4月にはフィリピン男子代表がアクアパークで合宿を実施し、産業大の部員が練習相手となった。関矢さんは「練習相手がいることは、合宿先として優位性がある」と産業大の存在に感謝する。

水球のまちを支える役割も担っている産業大水球部。男子の主将で4年の藤井敬聖選手(21)は「大規模な大会の運営に関わる経験は、社会人になった時に役立つと思う。競技でも結果を残し、地域をさらに盛り上げたい」と語った。

①水球の全日本ジュニア選手権大会で、試合用のロープを張り替える新潟産業大水球部の部員②同大会の会場で受付係を担当する部員③いずれも3月、柏崎市の県立柏崎アクアパーク

# 人間的な成長を促す



選手にアドバイスする佐々木洋輔監督

## 佐々木洋輔監督

元水球の選手で、2017年から産業大の男子水球部を率いる佐々木洋輔監督(34)は島根県出身・筑波大学院博士前期課程修了に、指導

方針やチームカラーを聞いた。

―指導方針は。

「自分の考えはあるが、周囲の意見に耳を傾けて、いいと思ったものは取り入れるようにしている。学生に対しては、社会に出て必要になるコミュニケーション力や、指示待ち

ではなく自分で気が付いて行動できる力が身に付くような指導を心がけている」

「数ある選択肢の中から柏崎の産業大を選んでくれた選手たちなので、一人一人に目を配り、技術はもちろん、人間的に成長できるように指導している」

―チームのカラーは。

「失点を少なくするため、ディフェンスを重視している。(産業大が22歳以下のカテゴリーを担う)ブルボンウォーターポロクラブ柏崎の考え方もそうだ。世界で戦うにはディフェンスができないと駄目だ」

―柏崎市は「水球のまち」を掲げている。  
「地方創生は若者が鍵で、いかに市内にとどめ、市外から来てもらう

## 取材メモ

練習拠点は県立のプールで、水球部の都合に合わせて好きな時間に練習できるプールはない。午前6時から練習することもある。恵まれた環境とはいえな中で、真摯(しんし)に水球と向き合う選手たち。彼らの挑戦を応援したい。